

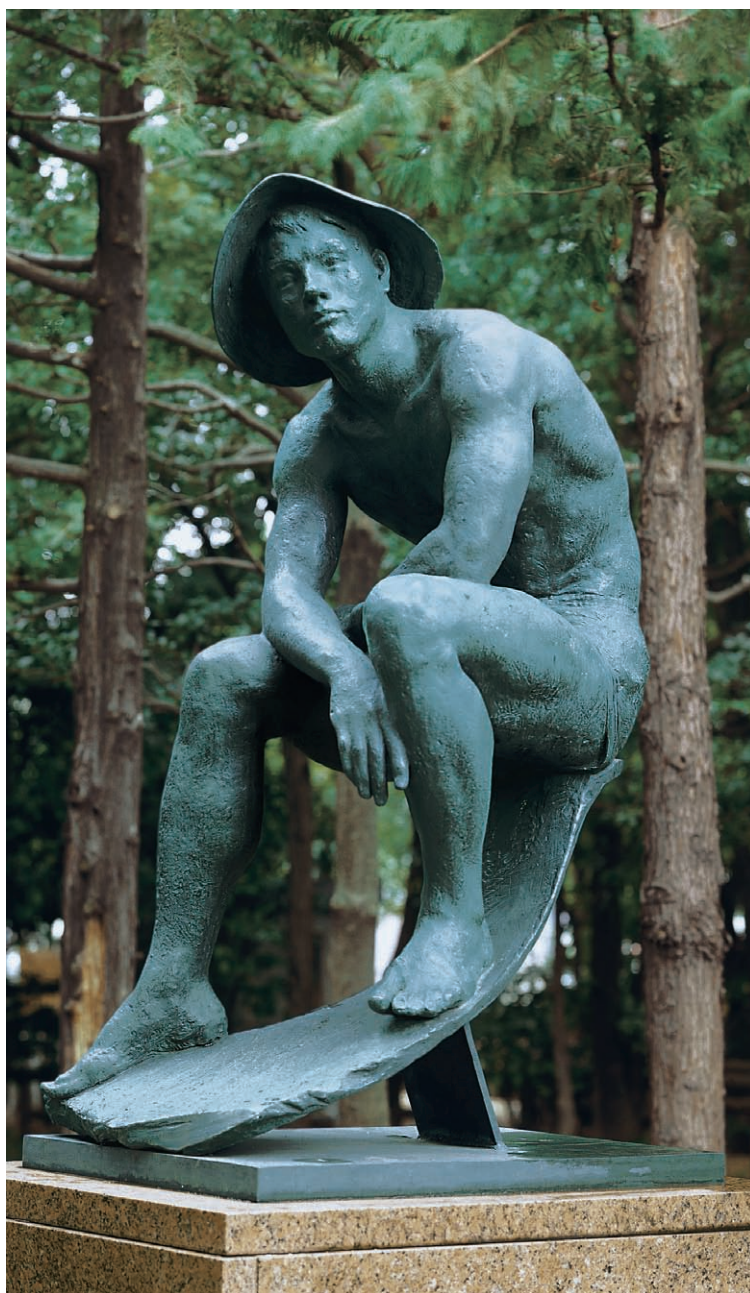
日展ニュース

No. 179

<https://www.nitten.or.jp/> 令和3年9月28日発行

編集兼発行人 土屋 禮一

第8回日展に向けて



腰掛けて
いる人

市村
緑郎



「第八回日展を開催するにあたって」

日展理事長 奥田小由女

令和三年暑い夏、オリンピック・パラリンピックが開催され感動致しました。世界的なコロナ蔓延の為、開催が一年延期となった事は選手にとっても、又、医療関係の方々その他多くの方々にとっても、大変な事態であったと思われます。

令和二年改組新第七回日展は、コロナ禍の中、密になるような行事やイベントは中止し、生命を守る万全の努力をしながら休まず無事に展覧会を開催させて頂きました事は、この上もなく有難く感謝致すところでした。

今回の第八回日展は、コロナが収束を

しない厳しい状況が続く中ですが、日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の五科が総ての力を合わせて懸命の努力を致し、開催することになりました。

医療従事者の方々の日々に心からの感謝をしながら、私達は日展を開催する事で、美術・芸術・文化を世に送り出し社会に役立ち度いと念じております。この厳しく苦しい時代を日展はみなで支え合い助け合って、必ず明けて来るその時を信じて努めて参る所存でございます。

皆様の御理解と御支援を賜ります様
お願い申し上げます。

第8回日本美術展覧会実施内容

会期 令和3年10月29日(金)～令和3年11月21日(日)
観覧時間 午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで)
休館日 毎週火曜日
入場料 ○当日券
○当日券

一 一般 一、三〇〇円
高校・大学生 八〇〇円
一、一〇〇円
高校・大学生 六〇〇円
○団体券(予約制)・前売券
※団体券は20名以上。20枚購入につき招待券1枚進呈。
小・中学生は無料。

会場 国立新美術館 東京都港区六本木七―二二―二
◎新型コロナウイルス感染症対策のため、入場制限を行う場合がございますので、あらかじめご了承ください。

jp114 since 1907

日展

第8回 日本美術展覧会
日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書

2021年
10月29日(金)～11月21日(日) 火曜日休館 国立新美術館

◆主催：公益社団法人 日展 ◆後援：文化庁・東京都 ◆観覧時間：午前10時～午後6時(入場は午後5時30分まで)
◆入場料：一般 1,300円(1,100円)/高・大学生 800円(600円)
※()内は団体20名以上料金 団体は予約制、消費税込。小・中学生は無料。ただし、入口で学生証のご提示をいただく場合がございます。
※チケットやイベントなど最新の開催情報は「日展ウェブサイト」<https://nitten.or.jp/> でご確認ください。
■新型コロナウイルス感染症対策のため、入場制限を行う場合がありますので、あらかじめご了承ください。

The Japan Fine Arts Exhibition

【お客様へお願い】
■以下の情報につきましては、ご案内をお伝えいただきますようお願いいたします。
37.5度以上の発熱や咳、くしゃみ、鼻水などの風邪の症状がある方。
※帰国後14日以内の海外や海外からの渡航歴や接触歴や発熱等の症状がある方。
■「海外渡航」または「海外渡航歴」がある方は、入場制限があります。※37.5度以上の発熱がある場合は入場をお断りいたします。
■展示場内等で咳やくしゃみ、発熱などの症状がある方は、スタッフが検問をけし、ご退場をお願いする場合がございます。
■マスクの着用が義務付けられています。マスクの着用が義務付けられている場合は、スタッフが検問をけし、ご退場をお願いする場合がございます。
■その他、本展覧会に関するお問い合わせは、本展覧会事務局までお願いいたします。
■本展覧会の開催期間中に、本展覧会事務局のホームページは、本展覧会事務局のホームページで公開いたします。
■本展覧会の開催期間中に、本展覧会事務局のホームページは、本展覧会事務局のホームページで公開いたします。
■本展覧会の開催期間中に、本展覧会事務局のホームページは、本展覧会事務局のホームページで公開いたします。

第8回日展 講演会・シンポジウム・映像による作品解説のお知らせ
新型コロナウイルス感染症対策のガイドラインにしたがい、講演会・シンポジウム・映像による作品解説等を左記の日程で開催いたします。

(入場無料) 於国立新美術館 三階 講堂
※各日、講堂前にて整理券をお配りします。(定員50名 30分前)

月 日	講演会・シンポジウム・映像による作品解説のお知らせ
10月30日(土)	午後1時30分～3時30分 (日本画) ※途中10分休憩 映像による作品解説「自作を語る」 今年度受賞者(大臣賞・都知事賞・会員賞・特選) 映像による作品解説 今年度審査員
11月3日(水・祝)	午後1時30分～3時30分 (洋画) ※途中10分休憩 今年度審査員と特選受賞者による座談会 今年度審査員と新入選者による座談会
11月6日(土)	午後2時00分～4時00分 (彫刻) ※途中10分休憩 シンポジウム「今、彫刻を作る意味を考える」 勝野真言・櫻井真理・野村光雄・前芝武史 坂本 健・脇園奈津江 作品解説「彫刻」 上田久利・小野啓亘・上田ふみ
11月13日(土)	午後1時30分～3時30分 (工芸美術) ※途中10分休憩 映像による作品解説「工芸美術」 今年度審査員 シンポジウム「特選作品を語る」 今年度審査員 特選受賞者
11月20日(土)	午後1時30分～3時30分 (書) ※途中10分休憩 シンポジウム「日展の書」 (進行) 真神魏堂 伊藤一翔・牛窪梧十・永守蒼穹・横山煌平・綿引滔天 作品解説「書」 遠藤 彊・近藤浩平・吉澤大淳

◎なお、今後の状況によっては変更が生じる可能性がありますので、最新情報は、公式サイトで告知させていただきます。

第八回日展 審査員・係

第四科（工芸美術） 審査員 一九名 第八回 日展《係》

（〇印＝係主任）

（外部審査員）

練馬区立美術館長 秋元 雄史
東京藝術大学名誉教授 樋田豊次郎
東京都庭園美術館長

第一科（日本画）

坂本幸重 〇橋本弘安 平尾秀明
池内璋美 石田育代 岩田壮平
加藤 智 中出信昭 森 美樹
諸星美喜 岡本明久 佐藤和歌子
谷川将樹 寺島節朗 林 秀樹

第八回 日展審査員 九五名

審査員長（理事長） 奥田小由女

第一科（日本画） 審査員 一九名

（外部審査員）

美術評論家 潮江 宏三
美術史家 安田 晴美
美術史家 福知山市佐藤太清記念美術館顧問

（準会員）

（理事） 湯山 俊久 小灘 一紀
（監事） 町田 博文
（会 員） 井上 武 伊藤 晴子
小川 尊一 大友 義博
大谷 喜男 北本 雅己
西田 伸一 石田 宗之
小牧 幹 児玉 健二
平野 行雄 福井 欧夏
前原 喜好
一の瀬 洋

第三科（彫刻） 審査員 一九名

（外部審査員）

川崎市岡本太郎美術館長 土方 明司
武蔵野美術大学客員教授 守屋 正彦
山梨県立博物館長
筑波大学名誉教授

第五科（書） 審査員 一九名

（外部審査員）

東京大学東洋文化研究所教授 板倉 聖哲
九州国立博物館長 島谷 弘幸

第三科（彫刻）

〇江里敏明 寒河江淳二 磯尾隆司
緒方信行 柏原花子 川崎義昭
寺山三佳 堀内秀雄 間島博徳
山下 清 吉居寛子 清島浩徳
鈴木紹陶武 鈴木徹男 中口一也

第四科（工芸美術）

〇相武常雄 叶 道夫 河野榮一
干田 浩 上原利丸 小林祥晃
佐藤好昭 田中照一 待田和宏
森田清照 十二町 薫 谷口勇三
南 正剛 向井弘子 向山伊保江

第二科（洋画） 審査員 一九名

（外部審査員）

大阪市立美術館長 篠 雅廣
東京ステーションギャラリー館長 富田 章

（準会員）

（理事） 能島 征二 山本 眞輔
（会 員） 江里 敏明 寒河江淳二
磯尾 隆司 緒方 信行
柏原 花子 川崎 義昭
寺山 三佳 堀内 秀雄
間島 博徳 山下 清
吉居 寛子 鈴木紹陶武
清島 浩徳 中口 一也
鈴木 徹男

（準会員）

（副理事長） 黒田 賢一
（理事） 高木 聖雨
（会 員） 真神 巍堂 高木 厚人
植松 龍祥 近藤 浩乎
関 吾心 内藤 富卿
森田 彦七 山本 大悦
石坂 雅彦 倉橋 奇艸
澤田 虚遊 寺坂 昌三
歳森 芳樹 森上 光月
吉澤 石琥

第五科（書）

〇真神巍堂 高木厚人 植松龍祥
近藤浩乎 関 吾心 内藤富卿
森田彦七 山本大悦 石坂雅彦
倉橋奇艸 澤田虚遊 寺坂昌三
歳森芳樹 森上光月 吉澤石琥

わくわくワークショップ

対象 小・中学生とその保護者

(参加費無料・保護者は入場券を各自用意ください)

実施日程

10月31日・11月7日・14日(日曜日)

午前10時30分～日本画・洋画・書

午後2時～彫刻・工芸美術

※各教室約2時間

申込受付

ハガキかFAXまたはメールで参加希望者の住所・電話番号・氏名・年齢・人数・希望日・希望部門(第2希望まで)を明記の上お申込み下さい。申込み多数の場合は、抽選とさせていただきます。

(受付締切10/25必着)

受付人数 各教室5組(10名程度)

☆日展作家が直接指導します。

☆参加費無料

【お申込み・お問合せ】

〒110-0002

東京都台東区上野桜木2-4-1

日展事務局展覧会係

(TEL) 03-3823-5701

(FAX) 03-3823-0453

(E-mail) event@niten.or.jp

第8回日展開催中のイベント

わくわくワークショップ ―特別編―

「手紙を書こう!」

前回に引き続き、いつでも参加していただけるイベントとして、「手紙を書こう!」を実施いたします。

作品をみて発見したこと、不思議なこと、聞いてみたいことを「言葉」にしてみよう!

●参加資格 小・中・高校生

●参加の方法

↓日展会場で作品をみて、好きな作品を選ぶ

↓「手紙を書こう!」コーナーで、その作品の作家に手紙を書く(質問、感想なんでもOK!)

↓作家から返事が届きます。

★日展会場の専用ポストに投函すれば、特製缶バッジプレゼント!

※公式サイトでも受け付けます。

(缶バッジプレゼントは会場のみ)

第8回日展では、新型コロナウイルスの感染拡大の予防措置として、左記のイベントを中止いたします。

●らくらく鑑賞会 ●ミニ解説会

●「触れる鑑賞」プロジェクト

尚、今後の状況によっては変更が生じる可能性もございますので、最新の情報は、公式サイトで告知させていただきます。

第8回日展行事日程(予定)

〓係会関係〓

10月17日(日) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表

(洋画・工芸美術)

10月18日(月) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表

(書)

10月21日(木) 午後3時

○入選者・特選受賞者発表

(日本画・彫刻)

10月28日(木) 午後3時

○大臣賞等受賞者発表

10月29日(金)

○第8回日展開会

11月11日(木)

○第8回日展授賞式

(国立新美術館講堂)

11月21日(日)

○第8回日展閉会

※開会式は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、本年度開催なし。

第8回日展前売券販売店のご案内

(10月1日より販売)

プレイガイド

チケットぴあ・C Nプレイガイド・ローソンチケット・ファミリーマート店内Famiポート、他デパート(友の会)

東武・丸広

カルチャーセンター

読売・日本テレビ文化センター

・NHK文化センター・ヨーク

カルチャーセンター、他

他に画材店・画廊・書道用品店などでも取り扱いがあります。

日展公式サイトでも販売しております。

《第8回日展チケット情報》

前売ペアチケット

通常、一般一枚一、一〇〇円(当日一、三〇〇円)の前売券を、ペアでご購入の場合、二、〇〇〇円に。通常の前売券より二〇〇円お得です。

※前売コンピュータチケット・

日展公式サイトのみ

トワイライトチケット



時間限定の入場券

観覧時間 午後4時～6時

一般一枚 四〇〇円

高・大学生一枚 三〇〇円

※会場窓口のみ販売

日展詣で

板倉 聖哲

日展はいわゆる官展の流れを受けた総合的な展覧会で、もとは日本画・洋画・彫刻・工芸美術の四部制であったが、昭和二十三年（一九四八）、第五科として書が加わり五科制となった。科によって状況は異なるが、近年では第五科（書）の応募が最も多く、狭き門となっており、会派を超えた書壇の「今」が質・量を伴って一望できる一年一度の機会といっても過言ではない。

私は中国を中心とした東アジア美術（絵画）史を研究しているが、日展第五科の鑑賞は現在の自分にかなり影響を及ぼしている。中国では古くから、描いた文字に美を見出し、書は画より上位に位置付けられ、前近代の東アジアにおいて美として共有されてきたが、日本では、近代に成立した美術史学の中にいまだに書道史を組み込んでいない大学がほとんどである。中国美術史を研究する上で、それは大きな壁となるが、祖父の梅畦（清 一八八九～一九七九）、父の境外（勲 一九三六～二〇一二）が共に書家という環境だったので、私にはその壁がなかった。

父が日展に初入選したのは昭和四十年（一九六五）、私が生まれた年である。そのため、物心ついたときから両親に連れられて上野の東京都美術館で日展を拝見しており、後に日展詣で

は習慣となった（現在の会場は国立新美術館）。他の団体展に比べても、展示された作品群に漲る緊張感が尋常でないことは子供ながらに感じ取れた。安定した様式を築いた大家の作品でも、明らかに何かが違って見えた。

日展の書には古典的なものから現代的なものまでさまざまなものが出品されているが、振り返ると、漢字は特に中国書の展開を強く意識し、対峙したものが多かったように思う。日本の書壇では、晋唐宋の「古典」のみならず、張璪・倪元璐・王鐸、金農・鄭燮、何紹基・趙之謙・吳昌碩といった書画家達の個性的な書風が流行し、日展では彼らの書風に倣った作品が少なからず出品された。私は、子供の時分、中国書に倣ったこれら現代書に親しみ、二玄社のモノクロ図版を見て、東京国立博物館などで基になった書家の作品に触れるという順であった。後に美術史学として学ぶことで、ああ、こういうことだったのか、と改めて得心することになるのだが、学びの前に現代書から造形的な見どころを教えてもらったのだ。

もともと、近年は異なる傾向が顕著であるように感じている。戦後日本の書を牽引してきた大家たちから次の世代へと交替し、大家の築いてきた美をさらに突き詰め、先鋭化させた作品が多くを占めるようになった。それは学ぶべき「古典」の広がりなのだが、個人的には、又、さらに「古典」が開拓され、新たな書美が追求・更新されることも期待している。

日展に訪れたら、もちろん他の科にも足を運ぶ。例えば、日本画の東山魁夷（一九〇八～一九九九）・杉山寧（一九〇九～一九九三）・高山辰雄（一九一二～二〇〇七）は新たな日本画

を主導した大家として「日展三山」と称されたが、彼らの作品などは必ず見に行った。特に好きだったのは高山辰雄、その象徴的な画面にたびたび惹き付けられた。後に、企画に参加した「南宋時代の絵画 才情雅致の世界」展（根津美術館 二〇〇四年）で、病が癒えたばかりだったにも拘らず、NHKの撮影でいらつしやつて、南宋絵画への強い思いを語っていただき、感慨深かった。

日本における伝統的な藝術の「今」が集う日展だが、それが毎年回を重ねることで、個人的な経験の中でも歴史化していく。そんな思いもあって続けている日展詣でだが、外部審査員に任命された今年は一段と異なる意識をもって足を運ぶことになるだろう。

板倉 聖哲（いたくら まさあき）



一九六五年千葉県生まれ。東京大学文学部美術史学科卒業。同大学院博士課程を中退し、東京大学文学部助手。財団法人大和文華館学芸部部員を経て、東京大学

東洋文化研究所助教授、現在、同教授。

編著に『中国絵画総合図録三編』（共編）全六巻（東京大学出版会 二〇一三～二〇二〇年）、『日本美術全集第六巻 東アジアの中の日本美術』（編・共著）（小学館 二〇一五年）、『李公麟「五馬図」』（羽鳥書店 二〇一九年）等多数。

歌舞伎俳優と芸術の使命

―日展を鑑賞して―

市川 海老蔵

一〇〇年を越える歴史を持つ日展は、日本を代表する美術展であり、時代ごとの日本美術の粋が展覧される場だと理解しております。私は二〇一七年に初めて日展の会場に足を運びました。第一科の日本画から第五科の書まで全て鑑賞し、各科の作品から伝統芸術とそれを踏まえた新しい表現というものを素人ながら感じ取り、感激いたしました。日本画では絵具の質感も作家それぞれ異なっていたり、モチーフに斬新さを感じさせるもの、洋画では西洋絵画の伝統を踏まえた写実な作品、抽象性がありながら作家の想いが伝わる作品がありました。彫刻では木彫・石彫・ブロンズなどの素材を技法で料理し、人や動物の生彩を放つ様をここまで表現できるのかと驚かされ、工芸美術は陶磁器や人形などのイメージがありました。作品の幅の広さを学ばせていただきました。書は漢字・かななどのジャンルがあり、その中でも書体や書風によって作品の雰囲気は全く違うのだなと感じ入りました。

会場には子供たちも同行いたしました。二人が目撃した作品を鑑賞していただくこともよく覚えております。様々なジャンルの美術品が一堂に展覧される展覧会は日展の最も魅力的な部分であり、子供の情操教育にも必ずや意味のあることだと思つたものです。



日本画・洋画・彫刻・工芸美術・書などの造形芸術と歌舞伎のような表演芸術は別のものに感じられますが、根幹にあるものは共通すると考えております。歌舞伎の歴史は安土桃山時代から始まったとされ、江戸時代から現代の多くの役者により様々な表現、演目、演出などが生み出され受け継がれてきました。同時に時代ごとに形を変えてきました。伝統芸というのは、脈々と紡がれてきた技や表現を最も大事にせねばなりません。それにばかり固執しているのでは時代錯誤になってしまいます。しかし、伝統を深く学ばず、ただ闇雲に新しいものを取り入れればよいというものでもありません。先人の教えを受け継ぎ、各人の解釈で如何に昇華・アレンジできるかということが歌舞伎俳優の命題であり、この部分が日展各科の作家にも共通するのではないのでしょうか。

ところで、歌舞伎の世界でも日本画や書が活かされていることはご存じでしょうか。例えば舞台の背景や襖に描かれる画では伝統的な画法が用いられていたり、看板に使われる文字は勘亭流と呼ばれ、江戸時代の書家岡崎屋勘六が生み出した独特な文字です。どちらも歌舞伎に合った姿で、歌舞伎にはなくてはならないものです。日本画や書が場所を変え、歌舞伎とともに歩んできたのだと思います。

芸術は多くの分野がありますが、おそらく全てに共通するものがあるのだと感じます。それは先人の足跡を学ぶこと、時代性、各個人の人間性の表現です。また東洋と西洋などの文化・

地域性による違いを理解すること、融合させるといったことも重要でしょう。歌舞伎俳優と日展作家、日本の芸術の一端を担う我々が、世界に日本の芸術文化のすばらしさを発信していきたいでしょう。今後も日展のご発展を心よりお祈りしております。

十一代目 市川 海老蔵 (いちかわ えびぞう)



一九七七年東京都生まれ。十二世市川團十郎の長男。一九八三年歌舞伎座『源氏物語』の春宮で初お目見得。一九八五年五月歌舞伎座『外郎売』の貴甘坊で七代目市川新之助を

名乗り初舞台。二〇〇四年五月歌舞伎座『暫』の鎌倉権五郎、『勧進帳』の富樫ほかで十一代目市川海老蔵を襲名。

日本の伝統芸能を次世代に伝えるべく、「古典への誘い」[LABYRINTH]などの自主公演や、二度に渡るシンガポール公演、二〇一六年にはアラブ首長国連邦、ニューヨーク・カーネギーホールにおいて「GRAND JAPAN THEATER」公演を実施した。歌舞伎だけではなく、映像の世界では二〇一四年に映画「利休にたずねよ」で、第三十七回日本アカデミー賞優秀主演男優賞を受賞。

歌舞伎俳優。

第八回日展 各科審査員より

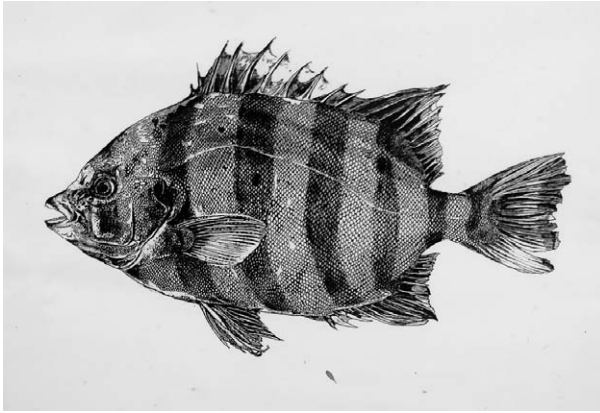
感謝と責任をもって

坂本幸重（第一科 会員・審査員）

日展審査員を拝命し、身の引き締まる思いです。私自身、日展の出品作に取り組むことで、自身身の全てに成長があったと感謝しています。審査に参加させていただくようになってからは、出品作品の全てが一生懸命に描かれており、そのエネルギーを素晴らしいと感じ、その作品に対して、全力で真摯に対峙しなければと努めてまいりました。

コロナ禍において、今夏もまた各地で災害がありました。先も見えず心身ともに落ち着いて制作することが難しい日々が続いています。そのような大変な

状況の中、出品される、一点一点の作品に対し、これまで以上の真剣さをもって審査にあたらねばと思っています。素晴らしい作品が会場に展示されることを、祈っています。



笹百合

池内璋美（第一科 会員・審査員）

この花が咲く季節になると思い出されることがあります。四十年前前のことです。当時、師の三輪晃勢先生は大阪の坂本にある西教寺で壁画を描いておられ、私はそのお手伝いをさせて



いただいております。ある日寺の近くで見つけた笹百合を一輪、制作室にお持ちすると大変喜ばれ、制作の手を止められるとすぐに写生を始められました。鉛筆を動かしながらそばにいる私に絶えず話しかけられる話題は多岐にわたり、その穏やかな語り口に耳を傾ける時間は楽しいものでした。

そんな先生は誰のどんな絵に対しても丁寧に接せられ、厳しい意見もご自分のことになぞらえ謙虚にお話されたものです。このような先生の薫陶を受けた私が、いつの間にかその当時の先生の年齢に差し掛かった今年、日展の審査員を拝命いたしました。三輪先生のお心を胸に謙虚な気持ちで、一点一点の作品に向かうことができますと思っております。

蝉しぐれ

林 秀樹（第一科 準会員・審査員）

出品される絵は、作者の思いの詰まった魂のようなものです。それを鑑審査することは、大変な迷いが生じるでありましょうし、苦痛と言ってもいいのかもしれませんが。

酷暑の日、普段よく歩く木立の中いつもより多くの蝉の泣き声が重なり、耳の中でハウリングを起こすような中で、突然その重責がまさに重りのように心の中にズシンと降りてきました。

この同じ酷暑の中、写生に汗している方もおられるでしょう。下絵に呻吟されている方もおられるでしょう。早くも本紙との苦闘を始めている方もおられるでしょう。その方達の声を自分もしっかり受け止めなければならぬ。かつて審査される側

だった自分は、する側のこんな重圧に思いも至りませんでした。

審査にあたっては、この日の思いを忘れず、真っ直ぐに作品と対峙したいと思っております。



崇高を求める精神は芸術の中に存在す

小灘一紀 (第二科 理事・審査員)

何回か審査をいたしましたでしたが、いつも一生懸命に描かれた作品の審査は重責で難しい。その上、洋画部門は出品者が多く大変な思いで審査をした経験があります。

そんな時、先輩方に「伝統ある日展として優れた作品を審査しなさい」の助言をいただいた。いつもこの言葉を思い浮かべ審査に臨むよう心がけている。

さらに私が揺るぎ無き審査の哲学としていること。それは優れた作品とは、技術の優劣もあるが、それ以上に多少荒削りでも作家が美を求め、あがき苦闘して創り上げた魂の入った作品をよく観て審査したいと思っている。

「人はパンのみによつて生きるにあらず」という言葉のように、人間は動物と違って精神を志向し、精神の為に死すことが出来る。それは命より大切なものがあるからだ。現代の物質主義は「魂の進化」を忘れてしまった。崇高を求める精神こそ芸術の中に存在している。



犀の角のように独り歩む人と共に

石田宗之 (第二科 会員・審査員)



この度、第八回日展審査員を拝命いたし、これまでご指導ご鞭撻をいただきました諸先生方にあらためて感謝いたしますと共に、大変身の引き締まる気持ちです。また、昨年より続くコロナ禍で多くの展覧会が中止を余儀なくされる中、日展開催に向けての多くの方々のご尽力に心より感謝しております。審査に当たりましては、その責務をしっかりと果たすべく、作品一点一点に真摯に向き合い臨む所存です。

コロナ禍での今日までの二年程を振り返りますと、制作活動における直接お会いしてのリアルな交流の機会は少なくなってしまうました。しかし一方で、部屋に閉じこもって沈黙黙考して制作する時間をいただいたのではと考えています。

「多くの人と話をしようと思うのなら、一人にならなければならぬ。」昔読んだこの言葉を思い出しました。自分の制作を突き詰めれば突き詰めるほど、いつの時代どこの場所の人とでも、お互いに通じあえる世界がきつとあると信じています。

心の思索

一の瀬 洋 (第二科 準会員・審査員)

日展は美の殿堂です。この度、初めて審査員を仰せつかった大任の重さに、深い責任を感じております。審査員として、一生懸命に務める所存でございます。自己の作品を省みれば、その未熟さを恥じ入るばかりで反省の日々を過しています。

昔から風景を描く事が好きです。大自然から学んで画面構成をし、造形的な美を求めて、高原で雪に埋もれながら何度くり返して制作を致しておりますと、生かされている気持ちを実感として湧いて来ます。

日本の精神風土における芸術に、少しでも近づけられるよう、努力を致しております。呼吸し生きている仕事を目標として、毎日をコツコツと美の探究のために研鑽を重ねて参る覚悟でございます。

最後になりますが、新型コロナウイルスの感染が、一日も早く収束に向かうことを、お祈り申し上げます。



感動する心

柏原花子（第三科 会員・審査員）



美大に入
学してま
なく、授
業の一環
で無声映
画「鉄路
の白薔薇
」を観ま
した。そ
時の感動
と衝撃は
今でも忘
れられ
ず、世の中
にこんな
にすごい
ものがある
のだと思
いました。

「いろいろなジャンルの芸術に触れたり、追体験することにより自分の感性を育む」桑原巨守先生の教えでした。実技以外に映画、舞台芸術、音楽などの初めて知る世界はとも興味深いものでした。感動する心が明日への創作へとつながりました。

日展に出品し始めた頃の数回の落選は、来年への意欲として若い自分が鍛えられたような気がいたします。

昨年より新型コロナウイルスのために世界中が新しい生活様式を余儀なくされています。そのような中、日展は人々に創造性あふれた美術作品を発信しました。このような時代だからこそ、人々の心が温かくなるようなそんな作品が求められているのではないのでしょうか。

審査にあたり、一人一人が強い思いを込めて制作した作品との出会いと感動を楽しみにしています。

自分と向き合う

鈴木紹陶武（第三科 準会員・審査員）

幼い頃より父に連れられ名古屋で開催された日展の巡回展を家族で鑑賞するのが、新春の恒例行事でした。

父や祖父、伯父に憧れ自分も大きくなったら父たちと一緒に日展へ出品することが夢でしたが、祖父が他界し、その後父も亡くなりました。高校、大学で彫刻を勉強した私は、父や祖父が出品していた四科（工芸美術）では無く、三科（彫刻）で日展に挑戦しました。初出品の結果は落選でした。その時は人生が終わったような感がありました。慢心していたと反省し、不安で搬入日の朝まで修正を続けた作品が、日展に初入選した時の喜びは、今も心に刻まれています。

この度日展審査員に任命され委嘱状を拝受し、喜び以上にその重責に、身の引き締まる思いです。これまでご指導

頂いた先生方に感謝し、今一度自分と向き合い、審査

で出会う作品とも真摯に向き合い、この

機会に彫刻への学びを深めたいと思

います。



新審査員として

中口一也（第三科 準会員・審査員）



東南に霊峰白山、北に石川県最大の河川手取川が位置する加賀平野（金沢平野）の自然豊かな土地で生まれ現在も住んでいます。この地は九谷焼の産地であり私の実家の家業は九谷焼の窯元でした。そのため子供のころは九谷焼を継ぐことになると思っていました。また、九谷焼で日展に出品されている作家がたくさんいらっしゃいましたので私も工芸で日展に挑戦するのではないかと考えていました。

しかし、たくさんの方々とのご縁があり彫刻を始めることになりました。子どもの頃の陶芸の粘土遊びの思い出があり塑像を中心に制作しています。そんな私がこのたび初めて第三科彫刻の審査員に委嘱されました。大変嬉しく思っております。不安もたくさんありますが、審査員として作品を拝見し、勉強するいい機会だと思っています。つい数年前まで審査を受けていました。その気持ちを忘れず、作者の制作意図も考え真摯に審査に向かいたいと思います。

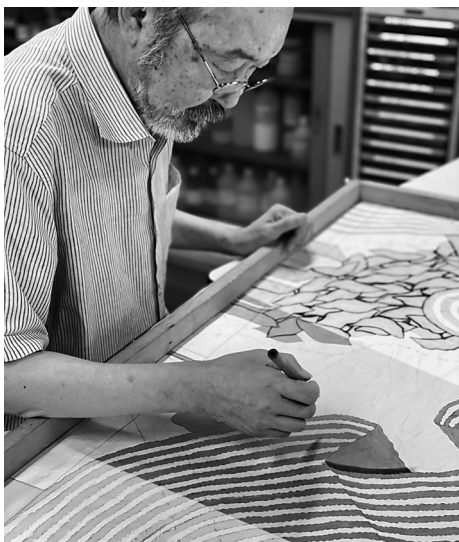
第八回日展審査にあたって

小林祥晃（第四科 会員・審査員）

この度、二度目の審査員を拝命するにあたって、初めて審査した時の事を、よく思い出します。

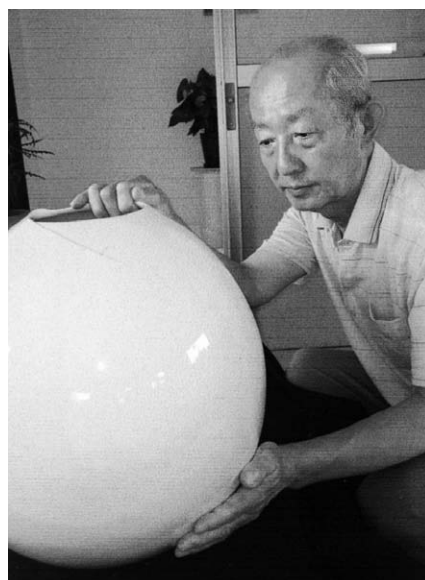
その時は、審査の形や流れがつかめず、先輩審査員の背中を見、教えを乞いながら、その重責をなんとか必死で全うすることができたという感じでした。

先輩審査員の先生方は、それぞれ作者の一年間の集大成とも言える作品に対して、責任ある姿勢をとっておられました。また、その態度を目の当たりにし、審査の厳しさを痛感しました。今回再び審査員としての機会を頂き、作品に込められた作家の様々な想いを感じながら、真摯な姿勢で、確かな審美眼を持つて、少しでも作者の糧となるように誠心誠意、公平公正な審査に臨む所存でございます。



日展に寄せて

待田和宏（第四科 会員・審査員）



この度、第八回日展の審査員の任命を受けて、その責任の重大さを痛感いたしております。

若い頃、鑑審査通知が届くと封筒の厚みを確認したものでした。薄いと落選の痛みを感じ、厚いと入選の喜びでいっぱいでした。

目には見ることでできない私の想いを物質化する技術（目に見えない何かを作品に投影する）と、基礎的な事はもちろん必須ですが、日展を楽しむに下さっている方々に感動を与えられる、そんな作品を制作したいと思います。そして、なにより、審査員の名に恥じぬよう一層作品に力を注がなければならぬと思いました。審査にあたって、真摯に、誠実に、公平公正に、出品される一点一点の作品にしっかりと向き合い、より素晴らしい作品とは何かを考えながら、鑑審査に臨みたいと思います。制作者として、発表する場がある、評価を得る機会がある、ということに感謝しております。

日展新審査員として

向山伊保江（第四科 準会員・審査員）

学生時代に七宝を学び、作品制作をしながらも、七宝が自身に向いている素材かどうか自問自答を繰り返すことがありました。

恩師である故佐野登志子先生をはじめ、七宝作家の諸先生方が古典的な技法に留まらず、表現法においても可能性を探り、後進の道を切り開かれました。アメリカのケイ・ウィットコムの大胆且つ繊細な作品構成と七宝独自の色彩を観たときは心が奪われ、七宝が如何に魅力のある工芸素材の一つであるかを実感しました。佐野先生より譲り受けたケイ氏の作品は制作の礎となっております。

この度、初めて審査員の委嘱を賜り、緊張と鑑審査の重責を感じております。

素材と技術を駆使し、表現の可能性を追求した多くの作品に出会えることと思います。

一点一点と真摯に向き合い、若輩者ではありますが、戴いた貴重な機会に感謝しつつ、誠心誠意務めたいと存じます。



真剣勝負

真神巍堂（第五科 会員・審査員）

私が初めて日展に出品したのは確か昭和四十二年だったと記憶しています。

勿論その年は見事に落選したので、次の年初入選し、以後二回目の特選を受賞した一九九六



年までの凡そ三十年間、毎年毎年入選通知を胸の鼓動を抑えて待ち、その封筒の厚みで歓喜し或いは落胆したものです。一年間の生活のリズムも日展中心になり、その通知を受け取った日から次の日展の作品制作が始まりました。とりわけ落選した時のあの内臓をえぐりとられるような苦しみを二度と味わいたくないために一年間精進したと言っても過言ではないでしょう。二回目の特選受賞の時、賞の大きさより、今日からはあの苦しみから解放されるという安堵感が先に脳裏に浮かびました。

平成十五年初審査員以降、今回六度目の審査員を務めますが、その都度あの苦しい経験を思い出し誠心誠意作品に対峙し、真剣勝負を念頭において臨みます。かかってこい！

コロナを逆手にとって

近藤浩平（第五科 会員・審査員）

この度、二度目の審査員を拝命し、その重責に身の引締まる想いでおります。

不思議な巡り合わせで私は今、書の奥深さへのめり込んでおりますが、学生時代は数学ばかり勉強していました。小五の時出会った数学塾の先生が、数学の面白さだけでなく、人生でどんな大きな山にも怯まず楽しく立ち向かうことを教えて下さったからです。

長期にわたる人類に立ちはだかる大きな山、コロナ禍での不自由な生活の中、増えたお家時間でも多くの方が作品作りの上で、構成や線の研究をし、書道の新たな挑戦に意欲を燃やされたのではないかと思います。オリンピックを見ていても最後は鍛錬と精神力が物を言うようです。暑い夏に踏ん張られたであろう方の作品を見落とさないよう、審査をするということは自分の見識が試されていることだと肝に銘じ、公平公正な審査をしたいと思っています。

そして、六本木の美術館に並べられた時、各々の作品が光っていたらと思っております。



第八回日展審査員を拝命して

歳森芳樹（第五科 準会員・審査員）



この度、日展の審査員を拝命し驚き、光栄であると共にその任の重さが日に日に増しております。

日展に出品するにあたり師匠から作品は一年でできるものではない。毎年何があっても出品し研鑽を重ねることが大事だ。と言われた言葉を胸にそれ以来毎年日展作品にそれまでの全てが凝縮出来るように取り組んでおります。しかし自身の思い描いた作品とはまだまだ距離のあるものとなっており一生鍛錬を強く感じております。

日展に出品される作品はどのような作家の全ての力、思いの籠ったものと思っております。それを受け止め、総合的に判断する事が求められる。それが審査員の務めの一つと考えております。

今回の審査に当たられる先生方に学びながら、今までの自分の経験も加え、一点一点の作品を真摯に見つめて良い作品をと襟を正し取り組んでまいります。

「夏休み一日ART体験」

第17回 **ワンデイアート**レポート

「今年こそは楽しい夏休みに
誰かが願っていたと思います。
未だ行動の制限がありますが、
大人も子供も感染症対策が日
常化し、出来ることの工夫もされ
てきたようです。」

今年も感染症対策のため、募集
人数は半数に抑えましたが、
「Oneday Art」の開催を
心待ちにしてくれた124名の皆
さんに参加していただきました。
連日の猛暑の中、限られた時間
でしたが、集中して仕上げた作品
はいずれも力作ばかり。

作品展は公式サイト（こども日
展ページ）で行い、共同制作は、
パブリックスペースや国立新美術
館の日展会場で展示を予定してい
ます。

《指導作家》

7月24日 彫刻

野原昌代 山崎茂樹 中原篤徳
寺山三佳 吉岡 徹
（サポーター） 安田陽子 廣川政和
（オブザーバー） 山田朝彦

7月25日 工芸美術（陶）

福富 信 林 香君 南雲龍比古
村田真樹
（サポーター） 村山恵子 高橋和則
村越郁夫

8月2日 洋画

田辺知治 佐藤祐治 茅野吉孝
田中里奈

8月3日 書

井上清雅 師田久子 綿引滔天
植松龍祥
（オブザーバー） 高木聖雨 永守蒼穹
（サポーター） 尾花太虚 角田大壤
齋藤真澄 滑田耀齋 松浦龍坡

8月8日 日本画

岩田壮平 亀山祐介 川田恭子
能島浜江
（オブザーバー） 米谷清和
（サポーター） 青鹿未奈 井上恵理

《ご協力いただきました》

株式会社吉祥、株式会社玉蘭堂、
株式会社ケーエス、株式会社東海丸
二陶芸、株式会社墨運堂



賛助会員制度《日展パートナーズ》
（掲載希望者のみ 令和3年8月末現在）

●個人

青木晃子 様	東 晋一郎 様
新井演子 様	飯田真未 様
石崎國夫 様	石崎喜江 様
井谷善恵 様	井上道守 様
今田功一 様	今村忠司 様
岩田 薫 様	奥田節子 様
奥田卓三 様	角井 博 様
梶山純子 様	金子美和 様
兼重勇希 様	栗原直子 様
呉 祐輔 様	黒田浩平 様
児玉安司 様	近藤慎男 様
坂本美賀子 様	佐川かおる 様
鈴木千壽 様	高木京子 様
高木寛史 様	田頭明子 様
田頭益美 様	高田久信 様
高橋千笑 様	竹本葉子 様
谷本佳美 様	土橋正彦 様
土屋礼央 様	鶴巻百合子 様
中谷幸司 様	中原有三 様
西田俊通 様	西村潤帰 様
西村友子 様	野田裕一 様
藤田理恵子 様	堀 稲子 様
松岡庸子 様	松原香織 様
松本正之 様	宮島幸男 様
宮原和朗 様	村里 暁 様
森寫順子 様	

●法人・団体

株式会社 IDホールディングス 様	株式会社 靖雅堂夏目美術店 様
医療法人社団 永寿会 様	公益社団法人 創玄書道会 様
株式会社 大垣共立銀行 様	株式会社 筑波銀行 様
株式会社 川端商会 様	T&Tパートナーズ法律事務所 様
株式会社 玉蘭堂 様	東洋額装 株式会社 様
謙慎書道会 様	公益社団法人 日本書芸院 様
ゴールド文具 株式会社 様	一般財団法人 ビオトピア財団 様
株式会社 福井素鳳堂 様	株式会社 便利堂 様
株式会社 靖雅堂夏目美術店 様	有限会社 丸栄堂 様
株式会社 高山草月堂 様	有限会社 みなせ筆本舗 様
株式会社 筑波銀行 様	株式会社 ミライト・テクノロジー 様
株式会社 日本書芸院 様	一般財団法人 桃園学園 様
株式会社 福井素鳳堂 様	株式会社 谷中田美術 様
株式会社 便利堂 様	株式会社 湯山春峰堂 様
有限会社 丸栄堂 様	菱三印刷 株式会社 様
有限会社 みなせ筆本舗 様	株式会社 リンクス 様
株式会社 ミライト・テクノロジー 様	株式会社 和光 様
一般財団法人 桃園学園 様	
株式会社 谷中田美術 様	
株式会社 湯山春峰堂 様	
菱三印刷 株式会社 様	
株式会社 リンクス 様	
株式会社 和光 様	



アトリエにて 30代前半



《L'allure (ラリユール)》

(平成22年 第42回日展出品作)

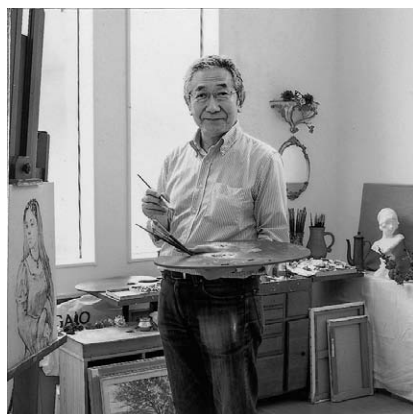
内閣総理大臣賞



《L'Aube (夜明け)》

(平成28年 改組 新 第3回日展出品作)

日本芸術院賞



《グレー春光》(平成14年)



出会い・真実

第二科洋画 理事 湯山俊久

自然豊かな静岡県東部小山町に生まれ、いつも目の前に富士山を見て育った。小学生の頃から絵を描くことが好きで、しかも担任の先生が油絵を描いていたことから油絵に関心が高まった。先生の描く油絵は、ペインティングナイフを使ってキャンバスに絵の具を塗ったり盛り上げたり、それまで水彩画しか知らなかった私には衝撃的で、水彩絵の具を盛り上げ、油絵のまねごとをしたりもし、ほどなく、油絵も描くようになった。

その頃から、美術館や、百貨店での展覧会を観に行くようになり、買い求めた複製画やポスターを部屋の壁一面に貼って楽しんでいました。

美術大学入学後も、縁あって、坪内正先生の自宅にある美術研究所に通わせて頂き、そこで絵画の基本を徹底的に学ばせて頂いた事は、たいへんなカルチャーショックであった。

その後、所属した会では、伊藤清永先生、中山忠彦先生に薫陶を受けた。

日展は、高校の美術部で初めて観たときから、一目でファンになった。作家として公募展に出すなら、最高峰である日展に挑戦することには何の迷いもなく、故郷の樹木と遠くに山を入れて描いた作品で、初入選。

卒業後も、絵に専念できる環境を整え、桃園学園四谷美術研究所の講師の経験は、独りよがりになりがちな作家精神を正し、とてもよい勉強になった。

出会った先生方は、皆、本格派で、一流であり、当然のように自分も妥協を許さぬ覚悟が高まっていき、その気持ちはずつと変わらない。

多くの人達との出会いがあった。そしてそこから見えてくる真実は、本物への大きな一歩であり、私の作家としての核をなしている。



彫刻を始めた昭和46年頃



アフリカ「ボリ」



《彩雲》(令和2年 改組 新 第7回日展出品作)

《一步》(平成29年 改組 新 第4回日展出品作)



《朝の響き》(平成27年 改組 新 第2回日展出品作)



日本芸術院賞

塊魂

第三科彫刻 理事 山田朝彦

ロダンの言葉に「肝心な點は感動すること、愛すること、望むこと、身ぶるいすること。」とあります。私は大学を卒業してすぐに、ローマを訪れたのですが、たまたま入ったボルゲーゼ美術館で出逢ったベルニーニの彫刻の強さ・圧力に正に身震いするほど感動したことを昨日のことに覚えています。この彫刻との邂逅が彫刻家としての原点だったような気がします。もう五十五年も前のことです。

これもまた随分前のことですが、銀座を歩いていた時、折に触れて立ち寄る店に、アフリカ彫刻「ボリ」を見た刹那、衝動的に買い求めてしまいました。いくつかアフリカ彫刻を持っていますが、この「ボリ」には不思議な魅力を感じています。これと言う主張も表情もなく、ただ「でーん」と存在するといったものです。精霊を呼び込むためのシンボルなのかもしれません。いづれにしても存在感があるのです。

この「ボリ」をスタンフォード大学のロダンの作品をコレクションしている美術館で目にした時は驚きました。展示室中央の一番良いところに「ボリ」が鎮座ましましてはありました。せんか：私の目も捨てたものではないなと思つたことでした。

彫刻を制作し始めて半世紀にもなりますが、多くの先達・先輩方にお教え頂き、今の私があります。そしてアフリカやアジア・ヨーロッパの様々な造形物もまた私にとっては良き導き手であり、良き友なのです。アトリエの棚に置かれたこれら寡黙な友(モノ)に触れるとき、声なき声を聴き、語らっているように感じています。

私は彫刻に宿る魂をいかに粘土で表現するのか楽しみながら制作を続けています。

画家の香月泰男の言葉に「実在感とは、そこに生命を持つたものがあると言ふことだ。在るやふに見えると言ふことではない。重量感と言ふことは、作者の人間重量のことである。」とあります。この言葉の意味を深く学びたいといつも思っています。

吉野川市文化研修センターにて

「日展所蔵作品展」併催―県内の
日展会員・会友作品展」を開催



徳島県・吉野川
市文化協会の主催
により、令和3年
7月20日から27日
まで、日展会館所
蔵作品83点の他、
県内会員・会友22
点、計105点の作品

を陳列し企画展が
行われました。
コロナ禍ではあ
りますが、二千人
近くの方々に来場
されました。



新刊行物のご案内

第8回日展作品集

- 定価 三、〇〇〇円（税込）
- 令和3年10月29日発行予定
- 五部門の全会員・審査員・受賞者の作品図版
- 別冊 作家本人による作品解説、
釈文（書）
- A4判変型
- オールカラー約一六〇頁
- 表紙 渡辺信喜・藤森兼明・山
田朝彦・中井貞次・黒田賢一
（出品作・予定）

第8回日展図録

（五部門五十分冊）

- 定価 各三、二〇〇円（税込）
- 令和3年11月3日発行予定
- 東京会場の全陳列作品図版・目録を収録
- （作家名・作品題名の読み仮名付）
- 全作品に作品寸法、工芸美術に
は技法を表記
- A4判変型

第一科『日展の日本画』

オールカラー約七〇頁
表紙 渡辺信喜（出品作・予定）

第二科『日展の洋画』

オールカラー約一五〇頁
表紙 藤森兼明（出品作・予定）

第三科『日展の彫刻』

オールカラー約六〇頁
表紙 山田朝彦（出品作・予定）

第四科『日展の工芸美術』

オールカラー約一二〇頁
表紙 中井貞次（出品作・予定）

第五科『日展の書』

全会員・審査員・篆刻はカラー、
準会員・無鑑査・特選・一般入
選はモノクロ 約二二〇頁
表紙 黒田賢一（出品作・予定）

※ご注文方法等、詳細はホーム
ページにてお知らせします。また、
Amazon（クレジットカード可）で
もお求めいただけます。

表紙

「腰掛けている人」

一九七八年（昭和五十二年）
第十回日展

155×56×8.5cm

市村 緑郎

（一九三六―二〇一四）

埼玉県戸田市蔵（後谷公園）

左の先生方が逝去されました。

謹んで哀悼の意を表します。

渡辺 晋先生（洋画・会員） 3・7・21

武腰 敏昭先生（工芸美術・準） 3・7・28

（日本芸術院会員）



八十一歳。昭和十五
年石川県生まれ。昭
和三十八年第六回日

展初入選。平成二年日展会員、同
八年日展評議員、同二十一年日展
監事、同二十二年日展理事、日本
芸術院会員、同二十三年日展常務
理事、同二十六年日展理事。平成
元年第二十一回日展審査員（以降
合計九回）。

永井鐵太郎先生（工芸美術・会） 3・8・7

石田 康夫先生（彫刻・会） 3・8・9

齋藤 二郎先生（彫刻・会） 3・9・1

編集後記

本号がお手元に届く頃は多くの
方が作品制作に大詰めを迎える時
期となるでしょうか。本号は「第
八回日展に向けて」をテーマに、
開催にあたって奥田理事長の挨拶
を初め、実施案内と特別寄稿を頂
いたお二人、各科の審査員、理事
の先生方からお寄せ頂いた貴重な
お話などを中心にお届けします。

紆余曲折を経て信じる一筋の道
を進んで来られた仕事ぶりは、皆
様の制作に大きな後押しとなるもの
と感じます。ご多忙の折、先生方
のご協力に感謝いたします。

コロナ禍での厳しい状況の下で
も、東京オリンピック・パラリン
ピックは感動の渦に包まれました。

この後は、制作活動を行う私達
も感動を国内外に発信できるよう、
徹底した予防対策を施した上で、
皆様の気持ちを一つにして最高の
「第八回日展」が開催できますよう
祈念しております。（清水）

編集委員 川田 恭子 水野 収

清水 優 前原 喜好

堤 直美 野原 昌代

月岡 裕二 友定 聖雄

西村 東軒 福光 幽石